

# 『呉越軍談』の構想と趣向

——紀海音独創期の浄瑠璃——

石 田 賢 司

## 一、はじめに

紀海音『呉越軍談』は享保六（一七二一）年閏七月五日から上演された彼の代表的作品である。この上演年次については『外題年鑑（宝暦版）』に、『呉越軍談比翼臺』の外題で享保六年九月十一日と記されているが、吉永孝雄氏は「東大國文研究室蔵の呉越軍談繪盡しの序には「〇〇（虫喰。筆者注）哉、豊竹氏呉越軍談の操出し、後の七月五日を初日とせし」とあるので七月五日である事は動かせない。又七月に閏のある年は享保六年であるのでこの呉越軍談比翼臺は享保六年後の七月（七月が二度ある後の）に興行されたのだ」と考証された<sup>(1)</sup>。吉永氏の考証を裏付けるのが、岡村日南子氏や秋本鈴史氏が紹介された<sup>(2)</sup>内山逸峰『伊勢参宮記』である。『伊勢参宮記』は、享保六年七月二十一日より閏七月二十四日までの伊勢上方への旅の記録である。逸峰は閏七月十日に豊竹座で芝居を観ているが、詳細なその記事内容から、彼が観たのは『呉越軍談』であることが直ちに判明し、吉永氏の考証とよく符合するのである。

紀海音の浄瑠璃作者生活の中で享保六年という年は独創期の中にある。独創期とは祐田善雄氏が規定された<sup>(3)</sup>もの

で、海音の作者としての成長の三段階の最終的なものであり、最も成熟した時期である。海音の独創期が果していつからかそうであるかを認めるのは、他の諸作品の上演年代の問題とも関わることであり、再検討する必要があるが、ともかく享保六年という年は独創期の中にあると言つてよいだろう。

海音の独創期について祐田氏は「此の期に入つて眞の海音の技倆が發揮出來たものと思はれる。この獨創期を中心に彼の藝術觀を研究する事が海音の玉成した眞の姿に近いのであつて、彼の思想的內容が變化した究極の到達點を根柢として彼の藝術觀を樹立すべきであらう」と述べられ、筆者もこの期の作品をより詳細に検討する必要があると思う。本稿では、独創期の代表的作品『呉越軍談』における海音の手法、特にその構想と趣向について考察し、海音の主題意識を知る手がかりにしたいと思う。

## 二、『呉越軍談』における先行作品からの影響

『呉越軍談』における海音による構想と趣向の特徴を知るためには、呉越の戦いを題材とした先行作品からの影響を見ておく必要がある。呉越の合戦に関する記述には主に『史記』卷四十一「越世家」、卷六十六「伍子胥列伝」、『国語』卷十九「呉語」卷二十一「越語」、『呉越春秋』、『伍子胥變文』などがあるが、これらを典拠にして日本において最初に作られた呉越合戦譚が『太平記』卷第四「備後三郎高德事付呉越軍事」である。増田欣氏は『太平記』「備後三郎高德事付呉越軍事」の成立について論じられ、直接的に典拠を見出すことができない説話として、范蠡が魚商に扮して勾踐の囚われている獄に近付き魚腹に書を入れて投じた話と、勾踐が寵愛する西施を夫差に献ずる説話を挙げられ、それらに『太平記』の特徴があると指摘された<sup>(4)</sup>。これらの説話は『呉越軍談』においても重要な要素であり、構想のレベルで『太平記』が主に参考にされたと考えられよう。また、夫差が伍子胥を誅し、その言

に従つて両眼を呉の東門に懸けたことは、『太平記』だけでなく諸書に記されているが、呉が越に敗れ、夫差が面縛されて呉の東門を過ぎるときに伍子胥の目に恥じることは『太平記』にのみ記されている。

『太平記』の表現も『呉越軍談』で利用されており、たとえば第一大序「会稽山呉王の陣の段」では勾踐が夫差から西施を献ずるように求められ、太夫種にも助かるためには夫差に従うように勧められ、

うろたへたるか太夫種。恥辱の顔を押のこび帰国を願ふも今一たび。西施に心がひかる、故。呉王へす、めば勾踐。生ても何のかひ有ん。へエ、かく成はつれば汝迄。我をかりしむ所存よな。是非なき今の身の上<sup>(5)</sup>

と言つて抵抗する。『太平記』では、場面が異なり、勾踐が越に帰国し西施との再会を果した後に献ずるように求められるが、

我呉王夫差ガ陣ニ降テ、忘レ恥、嘗ニ石淋<sup>ワスレハダダ ナメセキシツ</sup>、助レ命ヲ、全<sup>タスカリシヲ</sup>保<sup>マツククカニ</sup>。保<sup>ツ</sup>國身ヲ榮ヤカサントニハ非ズ、只西施ニ為<sup>セイシ</sup>結<sup>クム</sup>ニ偕<sup>シヤウ</sup>老<sup>ウチ</sup>契<sup>ケイ</sup>ナリキ。生前ニ二度別テ死シテ後期ニ再會<sup>ノナグセバ</sup>、保<sup>タモツテモバンジンヨクノクニ</sup>萬<sup>ナニ</sup>乘<sup>セ</sup>國<sup>サカ</sup>何カセン。サレバ縦ヒ呉越ノ會盟破<sup>タト</sup>レテ二度我為<sup>フタタビワレタメニ</sup>呉成<sup>ノナルトリコニトモ</sup>擒<sup>レ</sup>共<sup>ニ</sup>、西施ヲ送<sup>ル</sup>他國<sup>ニ</sup>事ハ不<sup>ズ</sup>可<sup>ベカ</sup>レ有<sup>アル</sup>。<sup>(6)</sup>

と抵抗するのに類似した表現であると言えよう。『呉越軍談』の同場面で、太夫種が勾踐の不承知に対し、御身の上をかへり見ず西施にみれんを残されて。勅諭をそむかれれば。越の国は滅亡し土地も美人も悉。呉王の物と成事をまだ御合点が参らぬか。

と諫めるが、これも『太平記』において范蠡（場面設定が異なるために太夫種でない）が、  
若今西施ヲ惜給ハ、呉越ノ軍再ビ破テ呉王又可<sup>イナク</sup>レ發<sup>ヤブレ</sup>兵<sup>ヲ</sup>。去程ナラバ、越國ヲ吳ニ被<sup>モシ</sup>レ并<sup>フ</sup>ノミニ非ズ、西施ヲモ可<sup>ベシ</sup>レ奪<sup>ラル</sup>。社稷ヲモ可<sup>ベシ</sup>レ被<sup>ラル</sup>傾<sup>カクアハセ</sup>。

と諫める表現に類似している。西施のために呉の政道が廢れることを危惧した伍子胥が、  
きみしろしめされずや。殷の討王姫妃を愛し周の幽王褒似をめ。國家の乱に身を亡す。

と例えを出しながら諫めるのも、『太平記』において伍子胥が

君不<sup>スヤ</sup>レ見<sup>イミ</sup>殷<sup>チノ</sup>紂<sup>チノ</sup>王<sup>ワ</sup>姫<sup>キ</sup>妃<sup>ヒ</sup>ニ迷<sup>マヨ</sup>テ世<sup>ヨ</sup>ヲ亂<sup>ミダ</sup>リ、周<sup>シウ</sup>ノ幽<sup>イウ</sup>王<sup>ワ</sup>褒<sup>ハウ</sup>姁<sup>シ</sup>ヲ愛<sup>アイ</sup>シテ國<sup>カク</sup>ヲ傾<sup>イナ</sup>事<sup>ジ</sup>ヲ。

と諫めるところの引用であらう。

なお、吉永孝雄氏は『曾我物語』巻第五「呉越のた、かひの事」が『呉越軍談』の典拠であると述べられたが、『曾我物語』は『太平記』を典拠として書かれたものであり、両者の構想や修辭は極めて類似しており、いずれが『呉越軍談』の典拠であるかは決め難い。本稿では『太平記』を『呉越軍談』の典拠として考えることにしたが、『曾我物語』が典拠でないというわけではない。

他に『呉越軍談』の典拠に関して、神谷勝広氏は『通俗列国志後編』（別名『通俗呉越軍談』）からの影響を指摘された<sup>7)</sup>。神谷氏は「海音『呉越軍談』第三に西湖姑蘇台の段があり、そこで「西湖八景」が出てくる。これを『曾我物語』はほとんど書いていない。一方、『通俗列国志後編』は巻七「呉王西施遊八景」で八景について述べる。海音は、『呉越軍談』執筆時に『通俗呉越軍談』を参照していたと考えられる」と述べられた。しかし、海音は『義経新高館』の「屏風八景」や『東山殿室町合戦』の「ざしき八景」などを設けており、節事に「〇〇八景」と題することは一つのパターンであったと考えられ、さらに確実な典拠例を挙げることが必要であらう。しかし、筆者も『呉越軍談』は『通俗列国志』から影響を受けていないとは考えず、たとえば、『呉越軍談』において、伯宰豁が勾踐の命を助けようとして、

降人<sup>かうじん</sup>を誅<sup>ちう</sup>すればわざはひ三世に及ぶと聞。いはんや越<sup>あつ</sup>は呉<sup>ご</sup>の隣<sup>りん</sup>国<sup>こく</sup>臣<sup>しん</sup>下<sup>か</sup>と成<sup>なり</sup>こそ幸なれ。一命<sup>めい</sup>たすけ帰<sup>かへ</sup>さればおんを荷<sup>にな</sup>ふて威<sup>ゐ</sup>に恐れ。二度そむき候<sup>まち</sup>まじ。

と語るのだが、『通俗列国志』でも同様の状況で伯豁が、

降<sup>チウ</sup>人を誅<sup>チウ</sup>し、服<sup>フツ</sup>するを殺<sup>コロサ</sup>ば、禍<sup>ワザハヒ</sup>三世に及ぶと云へり、況<sup>イハシヤエツ</sup>越<sup>エツ</sup>は呉<sup>ウ</sup>の隣<sup>リン</sup>國<sup>コク</sup>として、既<sup>ウケガフ</sup>に肯<sup>ケン</sup>て我<sup>ワ</sup>に臣<sup>しん</sup>とし服<sup>フツ</sup>するとき

は、當に赦してこれを撫べし、それ威を畏、徳を感じば、敢て再び叛事なからん<sup>(8)</sup>と語るのである。このような表現は『太平記』には見られないのである。

『太平記』、『通俗列国志』の他には正徳頃に読み物浄瑠璃の形で『呉越軍談』が刊行されており<sup>(9)</sup>、海音はこれも参照したかもしれないが、現在その所在は不明なので、その利用は知ることができない。

これまで先行作品からの影響を見てきたわけであるが、第一大序、第五に影響が多く見られるものの、作品の多くが海音の独創によるものと言って良さそうである。それは勾踐と西施、范蠡と歌朗君を中心とした展開であり、もう一つは伍子胥と東施を中心とした展開である。

### 三、海音の趣向（一）

越王勾踐が寵愛する西施を呉王夫差に献ずる説話は、『太平記』の特徴の一つであり、『呉越軍談』はそれから大きな影響を受けたであろうことは先に述べたが、当然、『呉越軍談』にもそれ自身の特徴があり、そこに海音の独創があるだろう。特に、『太平記』では、勾踐が越に帰国した後に、西施を献ずるように求められ、『呉越軍談』では、西施（実は歌朗君）が入内し呉王夫差に靡いた後に、勾踐の帰国が許されるという異なる展開をとっている。ここでは、『呉越軍談』の特徴を探り、海音の作意を考察して行きたい。

まず注目したいのは、海音は范蠡の妻歌朗君という新たな人物を設定し、歌朗君が西施の身替りになるという海音の趣向である。身替りという趣向は、浄瑠璃というジャンルにおいてはしばしばとられる方法であり、特に新しいものではないが、范蠡たちが勾踐西施の悲嘆をどのように受けとめ、そのために身替りとなるかを見たい。

『太平記』では、「誠ニ君展轉ノ思ヲ計ルニ、臣非レ不レ悲」と「范蠡流レ涙申ケル」ものの「臣情計ルニ、呉王好レ

淫<sup>イン</sup>迷<sup>マ</sup>色<sup>シキ</sup>事<sup>コト</sup>甚<sup>シ</sup>シ。西<sup>セイ</sup>施<sup>シ</sup>呉<sup>ニ</sup>後<sup>コノ</sup>宮<sup>キウ</sup>ヲ入<sup>イル</sup>給<sup>キ</sup>フ程<sup>ケ</sup>ナラバ、呉<sup>コ</sup>王<sup>ワウ</sup>是<sup>コレ</sup>ニ迷<sup>マ</sup>テ失<sup>シ</sup>レ。政<sup>ハン</sup>事<sup>マツリゴト</sup>非<sup>アラ</sup>レ所<sup>ス</sup>疑<sup>ウタガハ</sup>。國<sup>クニ</sup>費<sup>ツヒ</sup>ハ民<sup>ミン</sup>背<sup>セム</sup>ン時<sup>オキ</sup>ニ及<sup>ヨシ</sup>デ、起<sup>オコシ</sup>レ兵<sup>ヘイ</sup>被<sup>レ</sup>攻<sup>カ</sup>ム呉<sup>ニ</sup>勝<sup>サツ</sup>事<sup>コト</sup>ヲ立<sup>タテ</sup>處<sup>コロ</sup>ニ可<sup>ベシ</sup>レ得<sup>エ</sup>ツ」と呉を凋落させ、越を再興させる好機として捉えられているとも言えよう。『呉越軍談』では范蠡は勾踐西施の「わりなきいもせの御中を思ひ」やり、勾踐が囚われ西施を呉に入内させることを伝えるのを躊躇い、太夫種と擦り合うあたりに彼らも悲しんでいることが窺える。しかし范蠡は、勾踐が自身の「お命は越<sup>あつばんみん</sup>万民のたすけぞと。えいりよすゞしくあきらめ」たので西施にも「当座の歎は行末のめでたき逢瀬を頼みにて。一先呉王の宮中へ御入あれ」と観念して呉に行くように諭す。西施はそれを拒否し、勾踐の勅諭を嘆き、またそれを受け入れた范蠡たちを非難する。西施に見損なわれた太夫種は呉王を討ち取りに行こうとし、范蠡は太夫種を抑える。このように事態は膠着するが、それを解決するために、歌朗君が西施の身替りとして呉に入ることを進み出る。歌朗君が身替りとなるまでの彼女の葛藤が十分に描かれているとは言い難いが、その必然性は次のようにも考えられる。范蠡はなす術もなく、「古塚<sup>ふるづか</sup>の狐<sup>きつね</sup>にあらざれば。女にばくる手<sup>て</sup>でなく夫人<sup>ふじん</sup>に浮<sup>う</sup>めをかくる事。御了簡あそばせ」と語るのには、西施のために范蠡が身替りとなるものならば、それを厭わないが叶わないことを表している。もし、身替りを立てるとするならば、それは歌朗君であるが、范蠡は「汝（歌朗君。筆者注）にかくと頼みなばいやとはいはぬ心ていを。年月見届置たれど。かりそめならず一国と。つりがへに成計略に。しんぼうよりおこらぬ義は始終の大功立がたく。とやかくためらひるたりし」とある。しかし、その一方で歌朗君を身替りにすることは「此度の御供に女を召つれ候事。本国を出るより人しれぬ覚悟のまへ」でもあった。「かゝる時節の御身替武士につれそふ身の本望。婦人を立てる義理ならず。主人と夫<sup>おつと</sup>へいたす忠」とは、范蠡の台詞とも歌朗君の台詞とも考えられるが、范蠡の台詞であつたとしても歌朗君は夫の心情を理解していたと言えよう。そのために歌朗君が身替りとなつたのであるが、海音は、夫や子と別れる歌朗君の哀れを描くことに重点を置き、やはり彼女の葛藤が十分に描かれているとは言い難い。趣向をはめ込んだ感じがしないこともない。

歌朗君は夫差の妃として入内したが、勾踐の帰国が許されないので、范蠡は「あかぬ中を引きかれ。又ことかたになびかん事。世上のそしり女の義理。思ひ乱れてとやかくと呉王の心になびかぬゆへ。嫉妬の意地のましますとは必然の道理也」と推測し、「よしなき義理に大切の望をむなくさなされな」と意見するために、魚屋に扮して呉の東門に來たことを東施に告げる。勾踐はこの様子を物陰で聞いており、范蠡を「不忠の大悪人」と非難する。勾踐はさらに、故郷越への思い、現在の苦勞、西施への想いを語つた後に、范蠡の先の言動を「未練成ぞびきやうぞ」と罵り、鏡で打擲する。范蠡は勾踐に対しても、実の西施が呉に入内したものとして諫める。勾踐はその諫めを聞き入れないが、それでも范蠡は事實を語らない。勾踐は踊り狂つて走り去り、范蠡の真意は理解されない。

『太平記』でも范蠡が魚屋に扮する趣向は用いられている。それは、勾踐が捕らえられている牢に近付き、勾踐に敵に屈せぬよう勇めるためである。范蠡の思ひを知つた勾踐は「彼レ未ダ憂世ニ存ヘテ、為レ我肺肝ヲ盡シケリト、其志ノ程哀ニモ又憑モシクモ覺ヘケルニコソ、一日片時モ生ケルヲ憂シトカコタレシ我身ナガラノ命モ、却テ惜クハ思ハレケレ」と、范蠡の忠義を喜ぶ。『呉越軍談』では、歌朗君に夫差に靡くよう意見するための扮装であるが、ここで勾踐は忠臣の諫言を受け入れない人物として描かれている。勾踐が范蠡を批難する際に、「太夫種胸中何とやら所存有げに見へし」「両人心を合なば。能計略こそ有らめ」と考えていたことを語り、海音はここで観客に、歌朗君が西施と偽つて入内したことを思い出させる。しかし、范蠡は事實を語らず「此年月西施に心をうば、れて。御せいとうくらきに付。ぐんぜい心を傾けず身をかはいたる故により。思はぬふかくを取給ふ。御身の上の大敵は呉王より先西施也」と勾踐を諫める。「只一言で御疑ひはれるいひわけ有ながら」も、「申せば弥君の仇」となり、「成行末を見給は、我忠節はしり給はん」と考えたためである。ここでは勾踐の不覺と范蠡の辛抱が強調される。

第三切の冒頭で、勾踐が登場し、西施に想ひ焦がれ狂乱する様子が描かれる。『太平記』でも勾踐が西施との別れを嘆く場面があるが、『呉越軍談』の場合は歌舞伎のやつしが下敷きになつているかもしれない。西施は堪えかねて

声をかける。勾踐は急いで舟を着けるように言うが、西施は思うままにならないのは「義理と誓ひ」のためだと答える。勾踐は「ム、義理と誓ひのおもしとは。呉王へかはせし詞か」と言う。西施は現況を語り、「乱れし国も治りて。めでたふお歸り有迄は顔をば見せな詞をも。かはさじ」という誓ひは、范蠡の「君を思ひの忠義」のためであり、また、歌朗君が西施の身替りとなり呉に入内したことを語り、その「二人の衆の心ざし無になす事の悲しさ」のために思うままにはならないと答える。勾踐は、范蠡に対して「我眼力のくらみしゆへ忠臣を見ぞこない」、勘当したことを面目なく思い後悔し、歌朗君に対して「不便」に思い、「嬉しい共悲しい共礼をいふべき詞」をなくす。そして、「かく迄色にはおほれ」たことを悔い、「ろさんに釵の名を経たる嶺よ誠の釵ならば。我きづなをたてよかし。樵夫のかまをとぎたて、身の恋草を切からせ」と願い、思い切り難い西施を思い切る。その後、勾踐は歌朗君を奪い返そうと姑蘇台へ向かうところを范蠡に止められる。

勾踐が西施を思い切ることで范蠡の苦勞が報われ、観客も一先ず安心するが、海音はここで勾踐と范蠡をめぐる危機的状況を設ける。范蠡が勾踐を連れ出そうとする際に、夫差の率いる呉の官人たちに囲まれる。夫差が勾踐の帰国を許さないことを范蠡が責めると、伯宰嚭は「宣旨に偽なければ共是皆西施が心に有。君御寵愛ふかけれ共中／＼つれなくもてなすゆへ」と答える。范蠡は「勾踐様へのたてぶんはコレ。此はんれいがみこんで。いか程か嬉しいも忝な」と、歌朗君の貞節を褒めながらも、「それはかへつて仇と成」るので「呉王のお気に入給へ是西施様手合す」と諭す。歌朗君にすると、勾踐の帰国が許されないのは「りやうげちがい」のことであり、勾踐が呉を出ると「うき恥を見ぬ其先に。舌喰切て貞節を。妻に見せん」と考えていた。歌朗君は「君ゆへなれば今爰でしぬる命はおしからず」と考えるが、「妻より外に我肌をけがせと有はどうよくや」「道ならぬ。女の義理はかきがたし」と貞節を訴える。勾踐は夫婦のいずれもの言い分を思いやる。范蠡が、歌朗君に呉王に靡くよう再び諭すと、勾踐も「いふまい／＼はんれい。それでは汝が忠義はたつ。勾踐は又あの西施に。道ならぬ名を呼せ何と一分立物ぞ。必呉王に随ふな」と



貞節を守るよう諭す。

吉永孝雄氏はこの場を「全篇の中心で偽西施の哥朗君の貞節と夫范蠡の苦衷と越王勾踐の義理の三つが辻巴になって感興を最高頂に導く場である」と述べられたが、それぞれの言い分に理があり、それらに哀れを感じさせながら膠着した状況を描くことが海音の手法と考えられる。

その膠着状態を進展させる為の展開は、夫差が、西施が靡かぬのは「とかく勾踐有ゆへに。寵愛の邪魔と成」と考へ、勾踐を「はんれいともに打殺せ」と官人たちに命じることである。范蠡は「西施が心打とける。思案こそ候へ」「西施が御掟に随はぬは太子に心ひかる、故。夫婦の御縁切たる証拠」と言つて、東施から預かった伍子胥の子を突き殺す。范蠡に「今更悔て返らぬ義を。ひきやう至極のていたらく」「此太子は。はんれいが身にかへてもりそだてねは武士道の。すたるしさい候へ共当然の難を見て後日の事も返り見ぬ。忠臣の心ざし御推量あれかし」と語らせることによつて、彼の苦悩は描かれていと言えよう。しかし、范蠡は「生有時とは顔色も。少シ変じて見ゆる者」と言つて勾踐と歌朗君に見せ、二人は「よく／＼見れば見ずしらぬ。是はと計顔見合せあきれ。果たるけしき也」となる。つまり太子でも歌朗君の子でもないことは知られている。それにもかかわらず勾踐は「是こそ西施が中をさき帰国を急ぐ門出」と折れ、歌朗君も「夫にさられ子をころされ。たよる方なきみづからに哀をかけてだいて寝て。や、うませて」と呉王に靡く。子殺しという衝撃のある趣向をはめ込むことによつて、展開の必然性から目をそらさせる方法であるかもしれない。

これまで、『太平記』と『呉越軍談』を比較してきた。いずれも越の再興が主題とされているが、『太平記』のそれは越王勾踐の艱難辛苦が描かれているのに対して、『呉越軍談』ではその臣范蠡の艱難辛苦の方が強調されている。『太平記』において呉王夫差が石淋を病み、勾踐がその味を嘗める恥辱にあう説話、すなわち臥薪嘗胆の故事の由来の一つが重きをなすが、『呉越軍談』ではこの説話が全く出てこないことは海音の主題意識によるものではないだろ

うか。また、『呉越軍談』の冒頭には「伝へ聞勾踐は会稽山にとりこもり。種々の智略をめぐらせ共」とあることにも注目したい。おおよそ浄瑠璃では冒頭にその主題が述べられるものであり、この部分だけでは勾踐の艱難辛苦が主題であるとも言える。しかし、この句は謡曲『舟弁慶』からの引用であり、それには

傳へ聞く陶朱公は勾踐を誘ひ、會稽山に籠もり居て、種々の智略を巡らし、終に呉王を滅ぼして、勾踐の本意を達すとかや。しかるに勾踐は、ふたたび世を取り、會稽の恥ちを濯ぎしも、陶朱功をなすとかや<sup>(10)</sup>とあり、范蠡（陶朱公は范蠡引退後の名である）の智略や功が称えられていることが背景になっていると考えたい。

#### 四、海音の趣向（二）

二つ目の海音の独創として、東施に関する展開を見ていきたい。

東施という名は、『太平實字記』に「越州諸暨縣、有「西施家東施家」と見られる。また、東施の台詞に「せいしが胸をいたためたらわしも腹筋よるゝ」の。目顔も見事しかめる」とあるのは、顰に倣うの故事から出たものと考えられる。この故事の由来は『莊子』天運に記されているが、そこには「醜人」のみと記されている。これら両書の内容、すなわち東施の紹介と顰に倣う故事の由来を併せたものが正徳四（二七一四）年刊の『絵本故事談』卷之七に記されており、海音はこれより名を得たのかもしれない。しかし、これらには東施の詳細な人物描写はなされておらず、『呉越軍談』における東施像は他にモデルを求め、また、海音によって作られたといつて良いだろう。

第一中では、東施は容姿は醜いが心だてが優れた女性であることが強調されて描かれているが、心の優れた女性こそが理想であることは、たとえば貝原益軒『和俗童子訓』（宝永七（一七一〇）年成立）卷之五「女子を教める法」にも見られる。『和俗童子訓』には「おおよそ女は、容より心のまされるこそ、めでたかるべけれ<sup>(11)</sup>」と説く。「女徳を

えらばず、かたちを本としてかしくは、いにしえ今の世の悪しきならわし」として「周の幽王の後褒姒、漢の成帝の後趙飛燕、其の妹趙婕妤、唐の玄宗の楊貴妃」は「かたちはすぐれたれど女徳」がなかったので「天下のわざわい」となり、「其の身をたもた」なかった。その反対に、「いにしえのかしこき人は、かたちのすぐれて見にくきをもさらわで、心ざまのすぐれたるをこそ、后妃にもかしずきそなえさせ給いけれ」として「黄帝の妃嫫母、斉の宣王の夫人無塩」は「かたちきわめてみにくかりしかど、女徳ありし故に、かしずき給い、君のたすけ」となったという。また、「諸葛孔明は、このんで醜婦をめと」り、「色欲のまよいなくて、智も志もいよいよ精明」になったという。『呉越軍談』の東萊公が、「伍子胥が心てい察するに呉王西施をめで給はゞ。朝まつり事し給はず王道もすたらんと。未然に是を考て東施が貞烈聞及び。后にそなへ色欲のまどひを遠ざげおさへんため」と語るのは『和俗童子訓』に通じる考えだと言えよう。

しかし、『呉越軍談』における東施像がすべて『和俗童子訓』に見られるような女性像に基づくわけではなく、第一から海音による東施の人物造形が顕著に表れる。東施は夫差の妃となることを望んだが、それは「善を道引忠臣」となるためであり、「ほろぶる国を持たため。恵あまねく民の子を。撫やしなひてやすき世を千代万世」に保つためであり、「たみのなげきをやすめんため」であった。

第三口では、東施は夫によく仕え、呉王夫差への忠義を備えた人物として描かれる。また、賢女として強調されることにも注目したい。東施は魚屋に扮した范蠡を見破り、鱸の不審を問ひ詰める。范蠡は、呉王に靡くよう西施に意見するための密書であると答え、それを届けるよう東施に頼む。東施は「伍子胥が命ほろぼせし。其根元は何ゆへぞ。西施が色を遠ざけんと。心をくだきし一念」を思い、承知しかねる。しかし、「呉越と国はかはれ共君につかへるもの、ふの。心はかくも似る物か。御物語を聞内にわかれし人の倂が。めにちらつて思はずも歎の色を見せしぞや」と范蠡の忠義を思いやり、「情は二つ義はひとつ。是非に及ぬ次第や」と躊躇う。そして、東施は「はんれいは

呉の大敵。自然に参会する時は。たすけては帰されぬ」と語った上で、「おぬしは誠の魚屋。長居をするは商売しらず」「はやく帰れ」と范蠡を助けるための機転を利かせる。また、この際に東施は「顔ばせ忿声あらげ」て語ったのだが、観客は前半で范蠡の危機を想像し、後半での東施の機転に感心したのではないだろうか。この海音の手法は面白く思われる。

東施に関する展開の中で重きをなすのは、伍子胥の子の死を知ったときの怒りと悲しみ、その思いが范蠡や勾踐への恩ある義理へと逆転し自害する趣向であろう。東施は歌朗君に子を会わせるために姑蘇台に現われ、そこで伍子胥の子の死を知る。東施は「にくきははんれい」と語り、范蠡のもとへと急ぐ。范蠡に再会した東施は「汝ぞ相手一討」と范蠡に斬り付けるが、范蠡は自身を「義信をたがへぬはんれい」と言い、東施が「無体の遺恨をはさむ事汝が智恵のくらき所」としてその子細を語る。東施が「世倅を我にあづくる節。家名をあげてと頼し故」に、范蠡は「越の太夫になすべきと契約」したのであり、東施にそれを「わすれしか」と問う。そして、「既に主従極まれは時にのぞんで君の為。命をすつるは臣下の本望。三歳にして名をあぐると。長命にして埋る、と誉はいづれかまさるべき」と正当化する。「父の伍子胥は忠に死に。名はいさぎよく残れ共暗君につかへしゆへ。功は空しく埋れた」のに対し、その子の「明王の命にかはる忠勤は。天下にか、やく世倅が徳」である。東施の「願ひは叶ひし」と言い、「はんれいが。詞が違ふか道た、ぬか」と詰問する。

この范蠡の答えに対し、吉永孝雄氏は「亂暴な理窟で海音らしいが、當時の見物は感心して聞いて居たのであらう。後世の我々はこんな變な理窟では満足出来ない」と述べられた。筆者はさほど乱暴な理窟だとは思わない。しかし、先にも述べたように、范蠡が歌朗君に夫差に靡くよう諭す、ひいては勾踐の命を救うために子を殺すことが必然的なものであったかは疑問である。また、范蠡が子を殺した際に、「今更悔て返らぬ義を。ひきやう至極のていたらく」「此太子は。はんれいが身にかへてもりそだてねは武士道の。すたるしさい候へ共。当然の難を見て後日の事も

返り見ぬ。忠臣の心ざし御推量あれかし」と語ったが、東施の非難に対し「理非決然」と答えるところに范蠡の性格が統一して描かれているとは言い難い。

勾踐は伍子胥の子の死を不憫に思い、「幼少にしてばつくんの忠義を賞し末代迄。越の鎮国將軍職。軍世公とおくり名し。四時のまつりおこたらず。家名を代々にか、げん」と倫言する。范蠡の意図と勾踐の恩を感じた東施は、「ほろぶる呉国につかへるは父の教し一言と。夫伍子胥へたつる義理」に葛藤し、それを解決する行動として自害を選ぶ。

諏訪春雄氏は、この場を『呉越軍談』の悲劇的局面と捉え、その動機、状況への効用性、大義への献身の意識、主人公の周辺の弱者か否か、自発的意識の有無という五つの視点から分析された<sup>(12)</sup>。動機は義理によるものであり、状況への効用性は無く、大義への献身の意識は無く、主人公の周辺の弱者であり、自発的意識は有ると分析された。

しかし、状況への効用性という点からすると、東施の死によって呉が再興し越を滅ぼすことが可能になったと言えるのではないか。太夫種が東施を越に取りこもうとしたのは「勇義の賢女をひしぎなは呉の敗軍はまたたく内」と考えていたからであり、東施の死に際して東萊公は「珍重く呉の国の。柱はおれてほろぶべき御吉左右也前表也。是門出の金玉」とも語っているからである。

また、動機の点からも「さいごを急ぐも子ゆへの闇。生有時はま、しく共。死したるからだは血をわけし。我子となれ」と語るのに注目したい。勾踐や范蠡への恩と東萊公や伍子胥への義理に対する葛藤だけでなく、継子への愛情もが死の動機になっているのである。海音は東施を賢女であり忠義を備えた人物として描き、観客が彼女に共感同情させるように仕向けている。また、東施が范蠡を恨むことが「汝が智恵のくらき所」と言われるのだが、それは彼女が愚かであったためではなく、「子ゆへの闇」のために怒りと悲しみが深く判断ができなかったと受けとめられ、やはりここでも同情されるのである。悲劇的局面を悲惨なものにしないための配慮であると言える。

## 五、おわりに

『呉越軍談』は他の海音の時代浄瑠璃と比較すると、構想はよくまとまった作品である印象を受ける。廣末保氏は、近松門左衛門も時代浄瑠璃においては「劇全體を一貫した葛藤の構想でつらぬくことはできなかった」のであるが、近松と海音を同等に扱うことができないのは、海音は「世話物の一段をすら統一的に追求できないのが海音の方法だった」からであると述べられた<sup>(13)</sup>。『呉越軍談』では、その「劇全體を一貫した葛藤の構想でつらぬくことはできなかった」弱点が克服されたわけではないのだが、越の人物の困難を描く構想と呉の東施を描く構想というダブルプロットで展開させ、また各段に山場を設けることによって、ある程度の緊張感を維持させている。

緊張感の最高点に身替り・子殺し・自害といった趣向が設けられているが、その必然性が不十分と思われる面が無いわけでもなかった。横山正氏は海音の『新板兵庫の築島』の手法として、「この作品独特のものとして、緊張（緊迫）の手法がある。突発的事件に伴う危険感、あるいは意外な趣向と抗争や複雑な心理などによる異状な緊張、または理論的対立、理窟の積み重ねなどによるクライマックスにおける緊張感である。前者は観客の虚を衝く緊張であり、後者は正攻法的に正面から観客に緊張を持たせる手法である。そしてこの手法が、その作品と同一題材による説経や浄瑠璃に見られないところに、海音の手法の独自性がある」と述べられた<sup>(14)</sup>。

『呉越軍談』においては、観客の虚を衝くという手法としては、たとえば、伍子胥が夫差に東施を勧める趣向、伍子胥が東施を妻にする趣向、東施が范蠡の忠義を思いやり機転を利かせて救う趣向などは意外性があり面白いが、悲劇的な局面においては人物の葛藤を描かないままに行動させ、その必然性が不十分であることは否めない。

横山氏は、さらに『頼光新跡目論』の手法について「殆んど各段に、理窟に理窟を重ね、どうにもなくなるま

で抑圧して義理につまったところに、その結果として事件の新展開を行う手法がみられる」と述べられ、近松と海音を比較し、近松は「義理を糺す論争の結果だけから直接には何ら事件の新しい展開をみせず、論争などから哀れが生まれ、その結果が新しい事実の展開となる」「海音の方は「義理的論争→筋展開」である点が異なる。海音の場合にも全く哀れが絡まぬわけでもないが、基本的には哀れの感情に訴える段階を殆んど経ないで筋を展開させる」と述べられた。『呉越軍談』で行動する人物の葛藤が感じられず、必然性が感じられないのもこの点にあるだろう。

しかし、テキストによってのみ人物の葛藤が描かれていないと論じ、海音の技量が計られるものではない。海音は人形浄瑠璃の作品として『呉越軍談』を執筆したわけである。登場人物の葛藤は太夫や人形遣いが表現できればよかったのであり、それを想像しながら読まれる必要がある。また、観客も人物の葛藤を想像しながら観ることが人形浄瑠璃の魅力であると考ええる。

## 註

- (1) 「紀海音作『呉越軍談比翼臺』に就て」『上方』第四十八號（一九三四年十二月）なお、本稿において吉永孝雄氏の論文を引用しているものはいずれもこれによる。
- (2) 岡村日南子『内山逸峰集 享保く安永』（桂書房、一九八六年五月）  
秋本鈴史「享保六年閏七月十日の豊竹座——越中の内山逸峰が観た舞台——」『人形浄瑠璃舞台史』（八木書店、一九九一年二月）
- (3) 「紀海音の著作年代考證とその作品傾向（下）」『國語・國文』第六卷第八號（一九三六年八月）
- (4) 「『史記』を源泉とする説話の考察」『『太平記』の比較文学的研究』（角川書店、一九七六年三月）
- (5) 『呉越軍談』の本文引用は『紀海音全集』第六卷（清文堂、一九七九年二月）によるが、本稿では節章を省略した。以下同。
- (6) 『太平記』の本文引用は『太平記（日本古典文学大系）』（岩波書店、一九六〇年一月）による。以下同。
- (7) 「浄瑠璃と通俗軍談——文流・海音・近松の場合——」『東海近世』第十一号（二〇〇〇年五月）

- (8) 『通俗列国志』の本文引用は『通俗二十史』第二卷（早稲田大学出版部、一九一一年八月）による。
- (9) 『平家物語解題』『古浄瑠璃正本集』第七（角川書店、一九七九年二月）
- (10) 『舟弁慶』の本文引用は『謡曲集 下（日本古典文学大系）』（岩波書店、一九六三年二月）による。
- (11) 『和俗童子訓』の本文引用は『女大学集（東洋文庫）』（平凡社、一九七七年二月）による。
- (12) 『近世戯曲史序説』（白水社、一九八六年二月）
- (13) 『紀海音』『増補近松序説』（未来社、一九六三年九月）
- (14) 『近世の大阪演劇』『大阪の文芸（毎日放送文化双書）』（毎日放送、一九七三年十一月）